

2025年 令和7年 天下の奇祭 左義長まつり

ご案内

とぎまぎ ちよう 国選択無形民俗文化財

とぎまぎ ちよう 国選択無形民俗文化財

村雲御所瑞龍寺 (八幡山城址)

八幡山(鶴翼山)

運行時間 9:00~17:00 15分間隔で運行

山から琵琶湖や街並みを一望できます。

八幡山ロープウェイ

八幡公園 (WC)

豊田秀次公銅像

重要伝統的建造物群保存地区

八幡堀

宮内町

八幡宮

第二区

第一区

本町

池田町

紫竹会

新町通り

魚屋町

仲屋町

為心町

市役所臨時駐車場

市営小幡観光駐車場

多賀観光駐車場

西川五郎邸 特別公開

ウォーリス建築 特別公開 & ツアー

4/17~21 午前 10:00~午後 13:30

4/25~5/6 左記期間中に実施

詳細や申し込みは、チラシをご参照ください。お問い合わせは、近江八幡観光物産協会 0748-32-7003 まで

左義長まつりでは、ドローン(カメラ付マルチコプター)の使用は禁止しています。

左義長の起源といわれ

左義長まつりは全国的には正月や松飾りや注連縄(しめなわ)を集めて爆竹の火の行末として行われます。近江八幡の左義長まつりは江戸時代には1月14日・15日に行われていたようですが、明治時代に入ってから、太閤の採用に伴い3月に変更され、昭和40年代からは3月14日・15日に近い日曜日に開催されるようになりました。

元来、近江八幡の左義長は安土城下で行われていたもので、城下にあった八幡山から八幡山へ運ばれていました。種田信長が城下を移して来た人々は、既に4月に移っていた八幡山まつりに参加を申し入れましたが、松明の準備が無く、新年のことで断られたため、これに對して、安土で行われていた左義長まつりを始めたことが起源とされているとも伝えられています。

左義長の制作

左義長は松明、ダシ、十二月(赤紙)の3つの部分で1本にし、前後に棒を通し、つり紐を巻きつけて丸くし、竹の葉で包みつけます(これを全体を左義長と呼びます)。

町の人々の手作りにより、約2ヶ月かけてその年の干支に因んだ動物を主としテーマを決めて制作されますが、この素材が、穀類(大豆、黒豆、小豆、胡麻等)や海産物(鰯、昆布、すま、干魚等)などの食物物を使って、その素材の色を活かして作り上げることが大きな特徴です。

左義長まつり日程

3月15日(土)

12:30 ● 左義長宮入 (日産八幡宮馬場にて)
※奉納されるダシが一同(13基)に会します。
【撮影チャンス!】

13:00 ● 渡御幸祭 (日産八幡宮本殿にて)
※出陣前に役員が整列し祭礼を執り行われます。
※この際、左義長ダシコンクールの審査も行われます。

13:30 ● 渡御出発 (-----) のコース
※渡御は、神社祭礼で御神霊が神輿などで巡行すること。馬には神主や祭運営委員会名誉会長(近江八幡市長)が乗り、須田彦・大鼓が進み、赤紙を持った御旗見さん、その後各町の左義長が続きま。

14:15頃 ● 八中太鼓演奏 (白雲館前にて)

17:30 ● 渡御帰着・渡御還幸祭
左義長ダシコンクール審査発表・表彰式 (日産八幡宮能舞台にて)

18:00 ● 左義長宿入り・左義長ダシ飾り (各左義長宿入りにて)
※天候や町内の都合によって変更されます。

3月16日(日)

10:00 ● 左義長大祭 (日産八幡宮拝殿にて)
※本殿にて宮司が祝詞を奏上し、雅楽で巫女が舞を奏します。なお、祭りの間に拝殿に神輿が飾られます。その神輿の周りに、列隊する役員や各町の人々が玉串を捧げ参拝されます。

午前中 ~ 夕方 ● 左義長自由げい歩 町内を自由に練り歩きます。
※日産八幡宮馬場を中心に組み合わせ(ケンカと呼ばれるダシ同士へのぶつこみ)が行われます。

18:00 ● 鳥居前「魁魁れ (マッセ マッセ)」
※奉火の順番に従って順々に日産八幡宮を目指します。

20:00 ● 左義長5基一斉奉火

20:20 ● 奉納順の6番以下順次奉火

22:40 ● 最終の左義長の奉火

街角無料案内 左義長まつり期間中の両日、白雲館、八幡堀周辺などに待機しています。(11:00~16:30)
近江八幡観光ボランティアガイド協会 <https://omi8guide.com/>

滋賀第一交通タクシー 0120-377-535 近江八幡駅前北口観光案内所 0748-33-6061 (8:30~17:00)

近江タクシー湖東 0748-37-0106

※あかごんバス、まつり期間中、あかごんバスは、一部バス停に停車しませんのでご注意ください。詳しくは、市民バス運行管理室 (0748-36-5780) までお問い合わせください。
※日産八幡宮までは近江八幡駅前北口から近江鉄道バスにて約7~8分、徒歩で約30分かかります。詳しくは近江鉄道バスHPをご覧ください。(http://www.omitudo.co.jp/bus/timetable) ※左義長まつり両日は臨時バス等により増便されます。(近江鉄道バスあやめ営業所 1077-589-2000) ※当情報は3月7日現在のものです。

令和7年 左義長ダシ説明

奉納町	命題 / 【製作者】	材料	製作の意図の説明
第一区	ずいしょう 瑞祥 【第1区有志会】	カボチャの種、焼きかま、干瓢、紫芋フレック、寒天、パン粉、ベジタブルシート、とろろ昆布、海苔、雲平、ヒスタチオ 等	古来より蛇は幸運の象徴とされており、中でも白蛇は財運や繁栄をもたらす弁財天の使いとされています。発展を表す末広りの扇子、繁栄と未来への希望を示す宝船。これらの縁起物の中心に未来と将来を表す白蛇を製作しました。災害が絶えない世の中ですが、日本中へ幸福が訪れる兆しとなるよう願いを込め奉納します。
第二区	はくじゃしんこう 白蛇信仰 商売繁盛を弁財天に願う 【第二区ダシ制作委員】	食パン、アメ、にぼし、あらね、カボチャフレック、春雨、一味唐辛子、ココアパウダー	近年の日本は、様々な物価が高騰し多くの人々が財政難に苦しんでいる中、我々第二区ファミリーは、金運と商売繁盛の守り神として信仰される弁財天と、その化身である白蛇をモチーフに日本経済の繁栄と未来につながる子孫繁栄への願いと共に奉納します。
参和会	春夏秋冬二升五合 【参和会だし製作一同】	雲平餅、餅シート、寒天、焼き海苔、昆布シート、タピオカ、玉ねぎ、干瓢、青のり、などなど	四季の中に秋が無いことから、「あきない(商い)」。二升は「ますます(益々)」、五合は、升の半分なので、「はんじょう(繁盛)」と読み、「商い益々繁盛」と判じて読みます。白蛇は、財運招福の神、弁財天の化身と言われ、弁財天がこの神秘的な白蛇を神使とする理由も、弁財天が持つ「再生」や「繁栄」との関係からきています。
仲屋町	諸行無常の響き 【Suwai All Stars】	金平糖、湯葉	一粒一粒に祈りを込め描かれる砂曼荼羅は、完成後の祈りを経て、その芸術性にも関わらずすぐに壊されてしまう。作ることが目的ではなく砂を川に流し世界に祈りを届ける儀式である。腰を深く折り曲げ一心不乱に砂を落とすようにやく完成したものに祈りを込めすぐに自然世界へ戻す。近江八幡の下駄の音、諸行無常の響きあり。
為心町	門出 【為心町ダシ製作部】	食パン、焼タラシト、水飴、赤寒天、麻緒、焼海苔、干瓢、人工フカヒレ、乾燥葱、桜海老、紫芋パウダー、おき粉	蛇の目傘は、古来より邪気を祓い降りかかる災厄から身を護る魔除けとして、また花鞠と鶴は各々未来の開花、円満長寿を意味する吉祥の象徴として、婚礼の際に用いられてきました。干支の白蛇を白無垢の花嫁に見立て、真紅の蛇の目傘に花鞠と鶴を添え、歩み出す未来が慶福に満ち溢れたものであるよう祈りを込め奉納します。
宮内町	ごこしきょうふく 護国招福の蛇目傘 【宮内町】	雲平、煎胡麻、黒胡麻、寒天、米あらね、海苔、スルメ、柿渋、昆布	賤ヶ岳の七本槍唯一の猛将加藤清正は築城治水の技にも長け、堅牢な城と領国を築き民を安めました。彼の掲げた蛇目紋は厄災から家を守り幸福を招く象徴として今も愛されています。近年我国を襲い続ける天災地変に、清正公の魂は救世の蛇目傘となって人々を庇護し、水神の化身たる白蛇の双眸は地平天成の未来を洞察します。
魚屋町	りんじしつ比 鱗次櫛比 【魚屋町青年部】	剣先スルメ、たらシト、寒天、小豆、黒豆、乾燥玉ねぎ、魚玉、パスタ、焼きのり、人工フカヒレ	鱗次櫛比と行列を作る光景は私達の日常生活の一部となっている日本の文化です。実は大変だと感じるこの行動も一緒に並ぶ相手と会話をし、その相手との仲を深める機会となっています。私達も今日の左義長祭のために何ヶ月も時間をかけてきましたが、その大変な準備期間こそが家族や仲間との絆を深める大切な時間なのです。

奉納町	命題	製作者	材料	製作の意図の説明
新町通り	子の成長を願って 【新翔会】		餃子の皮、餅、のり、フカヒレ、黄金糖、桜えび、スルメ、押麦、とうもろこし、かぼちゃの種、玉ねぎ、板とろろ、板粟粉、粟、もち米、黒米、あらね、紫芋、寒天、干瓢、みじん粉、タピオカ、一味唐辛子、ふりかけ、アラザン、駄菓子、金平糖、ミンツ	「飾り羽子板」は、子どもの初正月を祝う際に用いられる縁起物です。「重ね闘」は多くの人々からの祝福と幸せの分ち合い、「藤」は長寿、「金魚」は豊かさを表します。巳年は新しい時代の始まりとされており、次の世代の子どもたちが目まぐるしく変わるこれらの時代を笑顔で過ごせることを願って奉納します。
紫竹会	春暁と白き神蛇の舞 【紫竹左義長実行委員会】	しゅんきやう しんじや	寒梅子、押し麦、赤寒天、干瓢、マカロニ、八角、コーンフリット、タピオカ、トロシト、松カンナ削り、ポン菓子、かぼちゃの種、みじん粉、ココの実	左義長の名の起源を紐解くと平安時代の宮中で行われた打毬(うちまわ)に由来する。毬は円満や調和の象徴とされ、幸運を招く縁起物とされている。梅と桜をあしらった毬が舞う中、白き神蛇がしなやかに踊り、春の訪れを祝福する。歩む先には幸福の兆しが広がり、人々の願いはそっと叶えられる。私たちは世の中の安寧を願い奉納致します。
本町	結 【本町青年会】	ゆい	煮干し、干瓢、黒豆、寒天、ザラメ、コーンフレック、オニオンフレック、ゆかり、紫芋パウダー	結びの最中の帯は、紐帯をもって結びつく人や、共同体が変化し、新たな成長を遂げて行く様を表します。様々な挑戦に向かう姿を二匹の蛇で表現し、帯を結ぶことで次の成長段階へと進めるよう願いを込め制作しました。皆様の挑戦が実を結び、更なる成長へとつながることを祈念し、ここに奉納いたします。
池田町	桜酒け! 御神酒いただき杵 【池田町一同】	おみき	そば、ひじき、唐辛子、かつお節、道明寺粉、かぼちゃの種、ビスタチオ、ねぎ、ごま、ふかひれ、赤寒天、米シート、栗、かんぴょう	日本古来から豊穣を願い神に供えた酒を回し飲み、酔った感覚が、神と人を結びつけたとされてきた。本年は、神の使いとされる白蛇に注がれた御神酒をいただき、天下の奇祭らしく遊興にふける様を表現し、製作した。春の訪れを象徴する桜と共に左義長祭りが未来永劫に咲き誇るように祈願し、奉納する。
十區會	龍鳳呈祥 【十區會左義長実行委員会】	りゅうほうていしやう	ゼラチンシート、黒米、タラシト、にぼし、たつくり、のり、ホワイトチョコ、ドライマンゴ、ドライレモン、雲平もち	再生や繁栄の象徴とされる蛇に加え、蛇と深い繋がりがあるとされる龍と相性の良い鳳凰を題材に作成致しました。神の使いである蛇と共に、英知・幸福の番人とされる龍に、至福・吉祥を招くとされる鳳凰。三位一体となり、この地に豊穣をもたらす、踊り子達の長久の繁栄を願って奉納致します。
第十一区	「災祓福招」の白蛇 【制作有志】	さいふくふくしやう しるへび	スルメ、干ひょう、ブラックペッパー、キヌア、ポップコーン、板エビ、青のり、黒胡麻、小豆、黒豆、もち米、しじみ貝、道明寺粉、黒海苔、白飯昆布、寒天、ふ菓子、トマト、カム など	繊細な透かし彫りと華麗な末広がり(ひらひら)の白檀扇子、また赤短冊の花札は一月松・二月梅・三月桜の歳時と左義長の春を表現し文字あかよろしは「明らかに良い」の意味があります。この縁起物に財運繁栄の象徴・白蛇を配しました。いざ踊り子よ、瓢箪の酒をめでたい盃で祝し、災いを蛇の如くクネクネとすり抜けて景気上げよう!

Welcome to Omihachiman

The historic district of Omihachiman centers on the old town just south of Mt. Hachimanyama. The building of a castle on the mountain's summit in the late sixteenth century sparked the town's development into a flourishing commercial hub. Between the mountain and the town is the Hachimanbori Moat, formerly a key transportation route between the town and Lake Biwa. Alongside the moat and toward the south stand the residences and storehouses of the merchants who brought prosperity to Omihachiman during the Edo period (1603-1867) by selling local wares throughout the country. Scattered among the traditional townhouses are a number of early twentieth-century Western-style buildings, most of them the work of William Merrell Vories (1880-1964), an American-born architect and missionary who settled in Omihachiman. Vories is remembered for his wide-ranging contributions to local life. The compact old town is laid out in an orderly grid pattern and easy to explore on foot.

Sagicho Festival

The Sagicho Festival is a colorful and dramatic celebration with more than four centuries of history. The festival is held annually in Omihachiman to mark the advent of spring and features parades of 8-meter-high floats, which are decorated with figures of the year's Chinese zodiac animal sign. Lively groups wearing colorful coats carry these floats about the town and engage in trials of strength called kenka, in which pairs of floats are pushed against each other until one topples over. At the climax of the festival, the floats are burned as offerings to the deities, and participants dance around the flames. The Sagicho Festival is an expression of both community pride and Omihachiman's mercantile heritage: each float is made and carried by residents of a specific neighborhood, and the flamboyant appearance and grand scale of the floats were historically made possible by the wealth of the town's merchant families. The festival, which has been named a National Intangible Folk Cultural Property, takes place over two days on the weekend closest to March 15.